

Y7 Canada 2018
Y20 Argentina 2018
会議報告書



ARGENTINA 2018
YOUTH 20

G7/G20 Youth Japan



目次

G7/G20 Youth Japan

G7/G20 Youth Summits の歩み	・ ・ ・ p.5
--------------------------	-----------

Y7 Canada 2018

概要	・ ・ ・ p.8
----	-----------

日本代表団	・ ・ ・ p.9
-------	-----------

Y7 活動報告	・ ・ ・ p.10
・ サミット中の活動	
・ サミット後の活動	

議論所感	・ ・ ・ p.14
・ Head Delegate	
・ Climate Change and the Environment	
・ Future of Work	
・ Gender Equality and Empowerment	

個人所感	・ ・ ・ p.18
・ 松村	
・ 谷本	
・ メルヴィル	
・ 水野	

Y20 Argentina 2018

概要	・ ・ ・ p.23
日本代表団	・ ・ ・ p.24
Y20 活動報告	・ ・ ・ p.25
・ 事前活動	
・ サミット中の活動	
議論所感	・ ・ ・ p.32
・ Sustainable Development	
・ Entrepreneurship and Self-Employment	
個人所感	・ ・ ・ p.35
・ 北野	
・ 木曾	

Conclusion

今後の活動について	・ ・ ・ p.38
協賛・謝辞	・ ・ ・ p.39

【添付資料】

Communique - G7 Youth Summit - Y7 2018

Communique - G20 Youth Summit - Y20 2018

G7/G20 Youth Summits の歩み

G8 (G7) & G20ユースサミット (Y8 (Y7) & Y20) とは、G8 (G7) & G20首脳会談に、年に一度開催される18-30歳のユースによる国際会議である。実際の首脳会談と同様、協議された成果はコミュニケ（共同声明文）としてまとめられ、G8 (G7) 及び G20の政策決定過程にユースの視点を反映する上で重要な役割を果たしてきた。

2006年4月にロシア・サンクトペテルブルクで開催された第1回大会では、G8各国からの代表団、欧州連合（EU）代表、そして国際連合代表のユースが参加した。2007年第2回大会はドイツ・ベルリンで開催。さらに2008年3月には、日本が議長国として第3回大会を開催し、G8各国と招待国（ブラジル、中国）の代表団が横浜に集まり、議論を行った。その様子は日本でもメディアに広く取り上げられた。

2009年にイタリア・ミラノで開催された第4回大会には、アウトリーチ5カ国（ブラジル、中国、インド、メキシコ、南アフリカ）からの代表団も議論に参加した。

2010年、更なる国際経済協力の必要性が声高に叫ばれる中、ユースレベルでもG20諸国の参画を取り入れ、カナダ・バンクーバーにて第5回大会が開催された。



2016年4月30日 Y7 Summit Japan 2016 代表団集合写真



2011年に行われたパリ大会では、各大臣会合のうち5会合を初めてG20の枠組みで行い、新興国を始めとする新たな参加者が迎えられた。

翌2012年はアメリカとメキシコの協力のもと、米国ワシントンD.C.にて大会が行われた。この会合では、新たにG8での法務大臣会合が実施されたほか、国際機関の代表も招かれた。

2013年には、イギリス・ロンドンにてG8ユースサミット、ロシア・サンクトペテルブルクにてG20ユースサミットが「Y20」として開催された。このサンクトペテルブルク大会からY20はG20首脳会談の公式エンゲージメント・グループ(※)となった。

2014年には、ロシア・モスクワで開催予定であったY8がG8首脳会談の中止に伴い開催無期限延期となってしまったが、オーストラリア・シドニーにてY20が開催された。

2015年度は、ドイツ・ベルリンで開催予定であったY7サミットが主催国ドイツの決定で中止となり、Y20サミットのみがトルコ・イスタンブールにて開催された。

2016年にはY7が日本で開催された。弊社G7/G20 Youth Japanは、例年の代表団選抜・育成に加え、Y7サミットの企画・運営を担った。また、Y20サミットは中国（北京・上海）で開催され、例年同様、代表団の派遣を行った。

(※) G20エンゲージメントグループ： G20への正式な政策提言を目的に、政治家や官僚以外の各セクターにより構成される。Y20（ユース）はそのグループの一角を占める。その他代表的なものに、B20（ビジネス）、L20（労働組合）、C20（市民社会）、T20（シンクタンク）がある。



2016年5月3日 Y7 Summit Japan 2016 運営員会集合写真

2017年にはイタリアにてY7サミット、ドイツにてY20サミットが開催された。Y20サミットでは、メルケル首相との政策意見交換の場も設けられた。

2018年にはカナダにてY7サミット、アルゼンチンにてY20サミットが開催された。

Y7 Canada 2018



概要



正式名称 : Youth 7 (Y7) Canada
主催者 : Young Diplomats of Canada (YDC)
後援 : G7 Canada
期間 : 2018年4月15～18日
場所 : オタワ
参加者 : 18-30歳の学生、社会人、政府関係者、研究者からなるG7諸国
(カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、イギリス、日本、イギリス、アメリカ)及び欧州

公式HP : <https://www.y7canada.com/>

概要 :
今年度のY7サミットは、オタワにて開催された。G7諸国、欧州連合から32名のユースが集結し、Climate Change and the Environment、Gender Equality and Empowerment、Future of Work の3分野について議論を交わした。また、会議期間中は代表団間の議論のみならず、有識者による講演、オタワ市内の歴史的建造物視察など、様々なイベントが行われた。尚、当サミットで作成されたコミュニケは4月18日、G7のシェルパに提出され、各国首脳が議論したのち、多くのユースの提言がG7首脳コミュニケに掲載されるに至った。



日本代表団



4月17日 Y7日本代表団集合写真
(左から谷本、松村、メルヴィルレイ、水野)

役職	氏名	所属(2018年4月現在)
代表団長	松村謙太郎	東京大学法学部第1類3年
代表	谷本英理子	東京医科歯科大学医学部医学科6年
代表	メリヴィルレイ ・はな	ニューヨーク大学アブダビ校 環境学専攻2年
代表	水野ふみ香	プリンストン大学教養学部1年



Y7 活動報告 (サミット中の活動)

1日目 (4月15日)

Y7代表団顔合わせ後、Audacious Futures というコンサルティング会社のホストの下、本会議に向けた打ち合わせミーティングが行われた。各国代表団の初めての顔合わせということもあり、それぞれが自己紹介をしたり、これまでの経験について共有し合ったりして交流を深めることができた。

夜には、カナダの国立芸術センターにて若者のメンタルヘルスをテーマにしたイベントに有志で参加した。



打ち合わせミーティングの様子

2日目 (4月16日)

Y7サミットの幕開けに際し、まず向かったのは、John G. Diefenbaker Buildingという、かつてオタワの市役所として使われていた歴史ある舞台。各国代表団と政府関係者が一堂に会し、オープニングセレモニーが行われた。カナダの首相ジャスティン・トルドー氏やカナダの環境・気候変動担当大臣キャサリン・マッケナ氏からのビデオメッセージが放送されたり、有識者によるスピーチが行われたりと、カナダ政府のコミットメントの大きさを実感するような場面に多く立ち会った。式後は今回のY7で扱う議題についてブリーフィングが行われた。

昼には3つの議題に分かれ、まずはそれぞれ10個ほど関心のあるテーマをリストアップ。そこから更に4つに絞り込み、最終提言書に載せる具体的な提言文を編纂するべく議論に没頭した。ソフィー・トルドー首相夫人始めカナダ政府関係者とのセッションや昼食会など、議論の糧となるイベントも盛りだくさんだった。

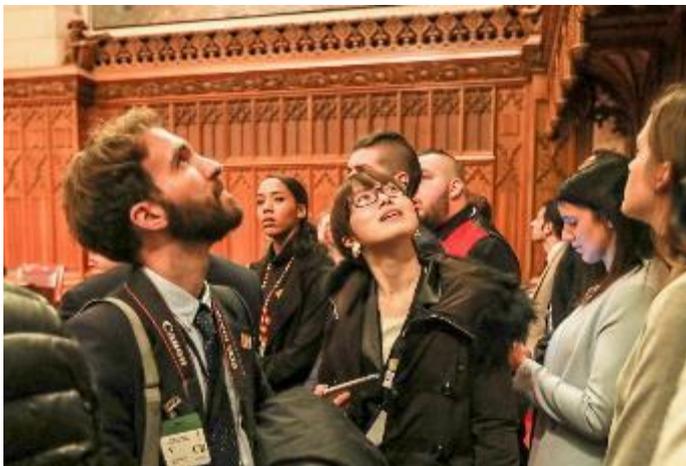


Y7 活動報告 (サミット中の活動)

3日目 (4月17日)

3日目は朝から3つのトピックに分かれて議論を行った。グループによっては議論が白熱し、なかなか最終提言書に文章として書く作業まで進まないところもあったが、それぞれのトピックのグループの中で、さらに細かくグループを分けてスピードアップを図るなどして、工夫をしながらスケジュールに合わせて議論を進めていった。

昼には代表団はカナダの議事堂に招待され、複数の大臣との昼食のセッションを持つことができた。



4月17日 カナダ議事堂のツアー



4月17日 カナダ議事堂で大臣と昼食セッション

会場に戻った後は、引き続き激しい議論の応酬が繰り広げられた。最終的に、コミュニケに採用される候補となる政策が3~4個に絞り込まれ、代表団長に提出された。夕食にはカナダの先住民担当大臣の議会秘書官からのスピーチがあった。



4月17日 Future of Work 議論の様子



Y7 活動報告 (サミット中の活動)

4日目 (4月18日)

正式なサミット日程として最終日の18日は、前日に議題ごとに作成した提言を全体で読み合わせた後、それを元に、代表団長を中心にG7シェルパとの最終会合が行われた。政策の現実性や国際協力の可能性など、幅広い視点でシェルパと直接議論が交わされた。その後更に代表団長による調整を経て、遂に最終提言書が提出された。提出後はユース担当大臣から議会において即座に提言がカナダ政府に向けて伝えられ、トルドー首相との電話会談により明確な方向性が伝えられた。



シェルパとの最終会合にて

ディナーではカナダ先住民の文化をテーマにしたイベントが行われた。伝統料理に、先住民によるラップやダンスのパフォーマンスと、非常に盛り上がった。その後はサミットの打ち上げを兼ねて日本代表団主催で"Sake Party"を開いた。日本から持参した日本酒やお菓子は他の代表団からも好評で、サミットの成功を分かち合いながら更に親交を深める楽しいひと時となった。



Y7 活動報告 (サミット後の活動)

5日目 (4月19日)

5日目の19日は、オタワからモントリオールに移動した。モントリオールに拠点を置くUNESCOのセクターや国際経済に関する公共政策団体などを訪問し、Y7の結果を報告して意見を交換するセッションが行われた。

6日目 (4月20日)

20日、日本代表団は大使館からの招待を受け、石兼公博・カナダ大使を表敬訪問し、サミットのコミュニケの内容を報告した。さらに、大使との面会が終わった後は、磯俣公使主催の昼食会がオタワ市内で開かれ、3時間にもわたり外交政策について語らう機会を設けて下さった。



4月20日 昼食会、磯俣公使ほか大使館の皆様と

昼食会后、オタワ市内に残っていたイギリスとドイツ代表団と合流し、カナダ歴史博物館を訪れるなどオタワとケベック州境付近を観光した。その後オタワで最後の夕食を共にした。



4月20日 観光の様子

4月19日 大使館訪問、石兼大使と



議論所感 (Head Delegate)

4月15日に最初のミーティングがスタートしたとは言えるものの、正味3日間で議論をまとめねばならないスケジュールは熾烈を極めた。その中で代表団長グループの一番厄介だったところは、他の代表団が「2日間かけて1つのトピックについて結論を出す」のに対し、「1日だけで3つのトピックについて結論を出す」というタイトさであろう。その難しさを誰もがわかっていたので、4/17までに各テーブルを回って議論の状況を把握し、時に議論が紛糾した際にはそのマネジメントにも従事しつつ、スムーズに最終日4月18日の提言作成に動けるよう各自心がけた。

そのような努力を実施したとしても、最終日の調整は紛糾した。各テーブルからはそれぞれ4つの提言が回って来て、ここに優先順位をつけてトッププライオリティとなったものをコミュニケに載せるという方針が定まっていた。しかしG7各国+EUはそれぞれが異なるイデオロギーを持っており、順位づけで代表団長グループが真っ二つに割れる、ということも少なくなかった。

例えば、Future of Workからの4つの提言のうち、元来強い力を持っていたのは「働き方に関する情報を誰もが閲覧・シェアできるプラットフォームづくり」という政策であった。イギリスが国内で実施しているように、各企業が自分たちの労働状況（女性率はどれくらいか、機械による自動化はどれくらいかなど）をデータとして表示したり、斬新なアイデアで社内に生産性を生んだ際にそれが他企業に波及する、そういった場所をオンラインで作るというものである。しかしながらこの概念を、フランス・ドイツなどイギリス以外のEU諸国は非常に警戒した。今年6月にEUのプライバシー法が改正された通り、ヨーロッパでは個人情報の保護という概念が非常に重んじられていて、インターネットの利用に慎重だったのだ。ICTのメリットを最大限に使いたい日本・アメリカ・イギリスと、個人情報の保護を実施したいEU各国の協議の結果、「データプライバシー」を最優先にしつつ、そのプライバシーが守られた上でICTの利用を進めていくという、良く言えば「中庸」悪く言えば「踏み込めなかった」政策に終わった。

用意された時間は短く、扱うトピックは幅広い。代表団長はそれらをマネジメントする気概と能力を持った人たちが集まっていた。不完全燃焼感は否めずとも、これこそがむしろ、多国間交渉の醍醐味なのだと思う。



議論所感

(Climate Change and the Environment)

「Remember the voices not at the table (ここに代表されていない声を考えよう)」という言葉は何回もサミットで繰り返され、Climate & Environment の議論ではこれが中心となった。例えば、気候変動の影響を先に感じるのは脆弱なコミュニティで、人々は貧しいほど災害から復活することに苦勞する。一方、G7のようなサミットに参加出来るのは大抵恵まれた若者だ。この不平等を意識しながら、以下の3つの問題に着目し、提言が作成された。

①二酸化炭素の排出量の増加が原因となり気候変動が起きているので、その問題の根本に注目すべきであるという考えから、「Decarbonization(脱炭素化)」。

②気候変動や海面上昇により、災害や難民が増えることが予測されているので、このような問題を予想した上で対策を準備する必要があるという考えから、「Adaptation (気候変動に対する適応)」。特にこれは次の世代が抱える問題であるからこそ、若者として強調させるべきであると意見が上がった。

③海へ流れていくプラスチックによって、水生生物が危機にさらされているとの考えから、「Protecting bodies of water (水域と水生生物の保護)」。また、4つ目に廃棄物管理の改善の観点から「Circular Economy (循環経済)」という主題についても議論したが、ほとんどの内容は結局③に含まれるようになった。

このように、環境問題の根本、より影響される人々、そして生物について提言が仕上がったことはinclusiveな意識感を反映していると思う。

この3点のうち、Decarbonization についての議論が最も重要な争点となった。特にイタリア代表がこのトピックを一番重要だと考え、G7首脳陣に提出しようと強く推し進めていた。一方、アメリカは「個人的には賛成であっても、この提言を出してもアメリカ政府は実行に移さない。それゆえ、最重要提言にするのは非現実的だ」と主張した。

結局、脱炭素化に取り組むことが必要だとコミュニケに書きながらも、より具体的な道筋が示された Protecting Bodies of Water (水域と水生生物の保護) を焦点に設定して、マイクロプラスチック問題の視点と対策も具体的にタイムラインを盛り込みながら、首脳陣に提出することとなった。

なお水域の保護についても議論され、カナダの代表から、川や湖などに「人権と同レベルの権利」を与えることが解決法として提案されたが、これが理想でも現実的でないと考えた国が多く提言には盛り込まれなかった。

結果としては、マイクロプラスチックについての政策がG7首脳陣によるコミュニケにもきちんと引用されていたのは、非常に嬉しいことだった。



議論所感 (Future of Work)

近年の産業の多様化、それに伴う雇用形態や就労状況の恒常的な変化を鑑みた提言がなされた。

いかなる社会的状況でも個人が最大限に潜在能力を発揮して働けるような環境を整えることが必要である、との考えから、“Social Security(国が個人の職をサポート)”と題した提言がなされた。これは、国民の就労状況を政府が把握するオンラインシステムを作ることで、個人が職業訓練を受けたり、起業したり、倒産したりした時に政府が金銭的援助を含めサポートを施せるような体制を整えるという、既にフランスで行われている施策を模範としている。

また、AIなどによる仕事の自動化は各国共通して関心の高いテーマだった。近い将来、高齢者や農村部の人々など、テクノロジーに取り残され、現在の仕事を失ってしまう人が一定数生じる可能性がある。“Lifelong Learning(生涯学習)”では、そのような個人が、AIなどのテクノロジーを使いこなす技術をはじめ、新たなスキルを身につけられるよう、政府が教育システムの構築・見直しを行うことを呼びかけている。

一方、テクノロジーにより未来の業種の幅や可能性が広がり、個人情報や政府や企業によって管理される機会が増えるからこそ、個人のデータプライバシーが侵害される危険性については認識を新たにしなければならない。この問題については、最終日のシェルパ会議でも熱い議論が交わされ、ドイツとEUのシェルパが、「個人情報の保護が確約されないとAIを導入できない！」と言わんばかりの勢いだったのに対し、アメリカは「AIの導入なんて、各国政府がやりたいようにやれば良いのに、なぜ国際会議でこの話をしているのか分からない」と、国によって全くスタンスが違ったのが興味深かった。結果として、G7全体では前者の立場が優勢となり、「データプライバシーは基本的人権である」との認識をG7各国が共有し、個人情報の保護を徹底する必要があるとして、“Positivity and Opportunities of Future of Tech (テクノロジーにより広がる仕事の可能性)”と題した提言が“Call to Action(一般公開用の最終提言文)”にメインの提言として掲載されるに至った。

“Future of Work”という議題について、“仕事・働き方”がそもそも人間の価値観や社会構造によって規定される以上、G7加盟国全体で同じ土俵において具体的な目標を打ち立て、共有することは不可能である。例えば、女性の働き方の支援システムには日本とヨーロッパ諸国とでは大きな隔りがあるため、産休後の女性の復職率に関して、温室効果ガス削減目標のように具体的な数値目標を共有しようとも、その必要性や実現可能性に国ごとに大きな差が生じてしまう。

しかし、アプローチを変えて、各国、各企業がベストな策を打ち出すための環境を整えることはG7が国際社会全体として取り組めることである。例えば、政府を通じて、各企業の働き方に関する情報が共有されれば、より良い職場環境に向けて企業にモチベーションとプレッシャーを与えることができるだけでなく、企業同士、働き方改革のロールモデルを見つけるネットワークの場ともなる。“Inclusiveness & Accessibility (皆がより良い働き方を求められる社会を目指して)”という提言では、「全企業が、男女間の収入格差や社員のメンタルヘルスなどについて報告することを義務付ける、政府主導の情報共有・公開用のオンラインシステム」という、具体性を伴った案として最終提言文に残すことができた。



最終日、Y7による提言の啓発方法をプレゼン(谷本)



議論所感

(Gender Equality and Empowerment)

ジェンダー・エンパワメント自体はサミットの三つの副トピックの一つであるが、サミット開始に際しカナダ当局から代表団全員に、女性やマイノリティのユニークな立場を考えながら議論する思考を持つことが奨励された。

グループでは、ジェンダーに関する問題は数多く存在する事実を認めた上、コミュニケに含める副議題は以下4つに集中することとなった。それが「女性と性的マイノリティの安全保証」、「女性や女の子のニーズに応える外交政策 (Feminist Foreign Policy)」、「女の子の教育へのアクセスと性教育」、そして「男女の収入格差を含む経済的な性差別の解消」となった。議論の結果、「女性と性的マイノリティの安全」を優先議題にすることになった。

性暴力やジェンダー・バイオレンス (Gender-Based Violence)、セクハラ、性差別が存在しない世界にはどのような政策が必要かを議論した。その結果、次のような提言が完成した。

- ・ G7各政府にジェンダー顧問 (Special Advisor) が特任され、顧問は民間企業と市民社会と共に以下の5つのエリアで政策を作り、年報を発表する
- ・ 性的マイノリティに対する暴力や人身売買を含むジェンダー・バイオレンス、ネット上でのセクハラを撲滅する
- ・ ユースのメンタルヘルス、社会的な態度やバイアスの是正、21世紀のライフスタイルに対応する性教育を提供する

議論中に話題に上ったものの一つとして、#MeToo Movement などの社会的な運動を具体的な施策に表す複雑さであった。性的暴力やセクハラを反対する声は現在、ネット上で世界的に増幅されている。そんな状況の中で、この問題をユースならではの観点から提言を行うことが我々の目標だった。

G7コミュニケのジェンダーに関する部分は、Y7コミュニケの議題と一致している。特に女性の経済的エンパワメント、紛争地や貧困地域に住む女性や女の子の教育へのアクセス、そしてネット上を含む性的暴力と男性や男の子の社会的な責任、は全てY7で議論されたものだった。

G7コミュニケの世界安全保障政策の部分にもジェンダー・エンパワメントの重要性が主張されている。G7各首脳がジェンダー平等の社会への必要性を認識している現状が明確化した。



個人所感(代表団長 - 松村)

代表団長の中では最年少だった私は、このあと谷本が記述している、在カナダ日本大使館の公使が言う多国間交渉の3要素"Language" "Substance" "Mentality" のいずれも不足していると自認せざるを得なかった。それくらい、経産官僚や大学院生など他国の団長は非常に聡明で視野が広く、使う言葉もUndergradの自分が使うそれよりも遥かに「場慣れ」していたように思う。

ただ、上の3要素以上に、私が自分自身に最も欠けていた視点と考える要素、それは「自分ごととして国際問題を考える」ことだと思う。私はサミット参加前、団長は「全ての議題をカバーし最後提言にまとめる仕事を行う」と説明を受けたので、「団長は全ての問題に対し、様々な議論を受け入れられるように中庸を保ち、柔軟な議論を行うもの」と考えた。そして全ての分野の問題点をさらいつつも、決して自分ではそれらに対して立ち位置を決めないようにして本番に臨んだ。

しかしこのスタートラインは蓋を開けてみれば失敗に終わった。代表団長はみんな各々強烈な個性を持って、「私はこの問題に対してはこの立ち位置を揺るがせない」という人々の集まりだった。立ち位置を決めず、「第三者」であろうとした自分は、彼らの白熱した議論の際、「一方の言い分もわかる。他方の言い分も理にかなっている。」ということだけでただ頷くことができず、"Then, Ken, could you tell us your position?"と意見を求められた時に、彼らを満足させられる「踏み込んだ」意見を提供することができなかった。私は確かに国際問題を見つめたのかもしれない。しかしそれは「自分ごと」としてではなく、間違った形での「第三者視点」だったのではないかと思っている。

俯瞰的な視点は確かに大事だった。しかしその柔軟性と、主体的な意見を持つことは、相反することではないことが、今回のサミット参加で得た大きな学びである。今後国際問題を考えていく中、改めて自問自答を繰り返し自分の問題意識を明確化させていくプロセスを続けていく歩みを止めてはいけないと強く胸に誓った。

末筆にはなってしまうものの、このようなサミットの間を提供して下さったカナダ政府・サミット実行委員会、代表団に選考して下さったG7/G20 Youth Japanの皆さま、共に戦ってくれた3人の日本代表団のみなさんに、心より御礼を申し上げたい。



個人所感(代表 - 谷本)



「外交の要はLanguage, Substance, Mentalityである」とは、Y7終了後、現地日本大使館へ表敬訪問に伺った際に公使からいただいた言葉である。まさしく私自身のY7での学びを体現した言葉であり、医学部に学び、将来、国際医療政策分野を志す身として心に響くものがあった。

インターナショナルな議論に参加するに足りる英語力(Language)は前提として、豊富な知識と経験に裏打ちされた、自分なりの確固とした意見(Substance)を持ち、それを良い意味での度胸(Mentality)を持って臆することなく発信すること。

G7首脳会議の公式会議という場に与り、国を代表することの重みに、幾度となく身が震えるような緊張感を覚えた。会議中、デスクに置かれた札に記された名前も、他国代表からの呼称も、当然、私の名前ではなく、“Japan”。私自身の発言が日本の若者の意見として国際社会に受け止められる。私が少しでも自分のスタンスに逡巡したり知識不足を晒したりしたら、大げさに言えば、それが日本の若者の地位を少なからず国際的に失墜させることにもなりかねない。そして当然、心の内に思いを滾らせるだけでは意味がなく、それを国際舞台で発信するだけのMentalityこそが重要だ。私自身、会議中に自らの知識不足や英語による交渉力の欠如に無力感を抱くこと数知れず、また、G7 Sherpaとの交渉においても、日本人はまだまだ国際的な発信力に欠けるのだと痛感した。

一方、Mentalityにまた別の意味を見出せたことはY7における最大の糧だった。同世代の各国代表団との議論を通じて、外交は根本的には人間関係だとつくづく感じた。国の代表として以前に、一人の人間としてアイデンティティを持ち、他者に思慮深さを持って接すること、それが良き人間関係、ひいては良き外交関係に繋がるのだと思う。ともすれば各国が自分の主張を押し通そうとぶつかり合うことが金とすらされる“negotiation”だが、Y7の場合、それは“collaboration”だった。限られたページ内にいかにして各国の思いを盛り込むか、この国とこの国の提言はこのフレーズによって包括的に言い表わせるのではないか。連日早朝から深夜まで交渉とイベント尽くしで心身共に疲弊した状況でも、皆が互いに歩み寄る姿勢を持ち続け、会議中、雰囲気が悪くなるのがただの一度もなかったことはとても新鮮だった。

私にとってY7の魅力は、月並みな表現ながら、まさしく“人”である。今の自分には決して追いつけないと思うような、キラリと輝く知性、感嘆するほどの人間性の双方を備えた、日本代表同期の3名をはじめ各国代表たちとの出会い、そして、彼らと関心や志を共有する同世代の仲間としても心を通わせられたことは生涯の財産となった。

最後に、Y7の最大の魅力は、広汎性を求めるあまり美しく抽象的な言葉を並べ立てたばかりのゴールセティングに終始するのではなく、大胆さと具体性の双方を備えた政策を提言できることであり、それこそ、学生以上社会人未満(他国代表には既に政府組織などで社会経験を積んでいる方も多くいたが)のtransitionalな世代の強みである。若者が声を上げて世界に変革をもたらすことができる、このような素晴らしい機会が存在するという事実を、今度は未来のY7代表団に伝え、バトンを引き継ぐことこそ、私たち代表団の使命と感じている。



個人所感(代表 - メルヴィル)

日本代表団の一人として今年のカナダで行われたY7に参加したことは、私の期待をはるかに超える経験になった。ジェンダー、未来の仕事、環境の三つのテーマについて実施する、“大胆でありながら現実的な”(audacious but pragmatic) 解決法を考えるのは難しいことだったが、「問題そのもの」よりも「具体的な解決法」に焦点が当たっていた為、十分に未来への希望を感じられるような会議でもあった。

私が担当したClimate and Environmentは、事前のやり取りでユースにとって一番重要な課題を模索していき、サミットではトピックを絞り、解決法を提案する作業に取り組んだ。主に4つの課題、“Adaptation”, “Circular Economy”, “Decarbonizations” と “Oceans” について議論し、結局この最後の海や水域の保護が最も重要なトピックであるとして、G7首脳陣に提出した。

UNFCCCでインターンした方、環境コンサルタントとして働いている方、大学院で環境工学を勉強した方などに囲まれ、ハイレベルな議論を通し、良い最終提言を作り上げることができたと感じている。知識が豊富で、環境問題を能動的に解決しようという意志の強い他国の代表達を相手に議論が出来たことは、何より幸福なことだった。また、カナダの環境大臣からビデオレターをいただき、海洋担当大臣と直接お話をし、G7首脳陣によって取り入れられやすくするような表現についても指導を頂けたことも大きかった。

このような努力の結果、6月のシャルルボワG7サミットの最終的なコミュニケに私たちの政策が直接引用されていた部分もあった。特に、ユースの提言と一致する「海洋プラスチックチャーター」がカナダから準備され、G7の中の5カ国がシャルルボワでこの提言に署名したことは大きな成果だ。この結果を見ても、私たちユースの声が国の政策を動かす可能性を感じることができる。

そして何より、ユースサミットが終わった後も、気候変動や海洋プラスチックについてたゆまぬ議論を続けるY7の仲間たちを見ていると、私はこれからの美しい世界の未来へと、希望を抱かずにはいられない。



個人所感(代表 - 水野)

先ずは、Y7サミットに参加する機会をくださったG7/G20 Youth Summits Japan運営事務局の皆様にも心から感謝申し上げます。オタワでサミットを運営してくださったYoung Diplomates of Canada (YDC)のチームの皆様にも感謝申し上げます。このようなハイレベルなサミットで議論するにはまだまだ未熟である自分の提言を真剣に検討し、ディスカッションしてくださった国際代表の皆様にも深く感謝申し上げます。

今回のサミットではコラボレーションの大切さが重視された。特に現在、2018年の国際関係の状況を見れば、その理由は明白だ。カナダ当局は、初日からサミットでの議論はディベートではなくコラボレーションであることを繰り返し強調した。議論をコラボレーションとして根本的に考え直すことは、ディスカッションの本質に大きく貢献した。G7各国の政策を比べ合い、競い合う形ではなく、異なる文化や政策を持つ各代表の提言をどのようにつなぎ合わせるかの方法を探っていった。特にジェンダーのテーマは議論を単なるディベートの形でやりきると複雑なニュアンスが見落とされる可能性が高い分野である。まさにチームワークを通してたどり着いたコミュニケであった。

6月にシャルルボワで開催されたG7サミットのコミュニケが公表された後も、ジェンダー担当の代表団内でディスカッションを続けた。コミュニケを見ると、G7各首脳ジェンダーに対する政策は私たちユースの提言とほぼ一致していた。若者の声が政策を動かす可能性を身にしみて感じた。

一方、自分の未熟さも改めて感じた。まだ大学の専攻も決めておらず、知識と経験がまだまだ不足している自分には、学ぶことが数えきれないほど多いサミットであった。尊敬する各国代表団のみなさんから、これからも成長し続ける強いインスピレーションをいただいた。



Y20 Argentina 2018



ARGENTINA 2018

YOUTH 20

概要



正式名称 : Youth 20 Argentina 2018
主催国 : República Argentina
期間 : 2018年 8月12日(日)から8月18日(土)
場所 : アルゼンチン コルドバ
参加者 : 18-30歳の学生、社会人、政府関係者、起業家からなるG20諸
国、招待国、及び招待団体の代表団 計70名
参加国 :

Official delegate- アルゼンチン、ドイツ、オーストラリア、ブラジル、カナダ、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、イタリア、日本、韓国、中国、メキシコ、ロシア、サウジアラビア、南アフリカ、トルコ、イギリス、アメリカ、欧州連合、オランダ

Guest Delegate、アルゼンチン、シンガポール、アルバニア、イラン、アラブ首長国連邦、モロッコ、インドネシア、フランス、ナミビア、ナイジェリア、チェコ共和国、日本

公式HP : <http://youth20.org/>

概要 : 2018年度のY20サミットはアルゼンチンのコルドバにて開催された。G20参加国からの代表団40名に加え、公私両セクターからのユース約35名の計75名が集結した。会議期間中は、政策提言に向けたディスカッションセッションの他に、デザインシンキングセッション、政府関係者との意見交換、地域のプロジェクト訪問、コルドバ市内観光など、多様なプログラムが用意されていた。合意した政策提言書を元に、代表団は各国政府との交流やアドボカシー活動など、代表団としての使命を継続している。



日本代表团



8月13日 Y20日本代表团集合写真
(左から木曾、北野)

役職	氏名	所属(2018年8月現在)
代表団長	北野 麻理恵	東京医科歯科大学
代表	木曾 美由紀	証券会社



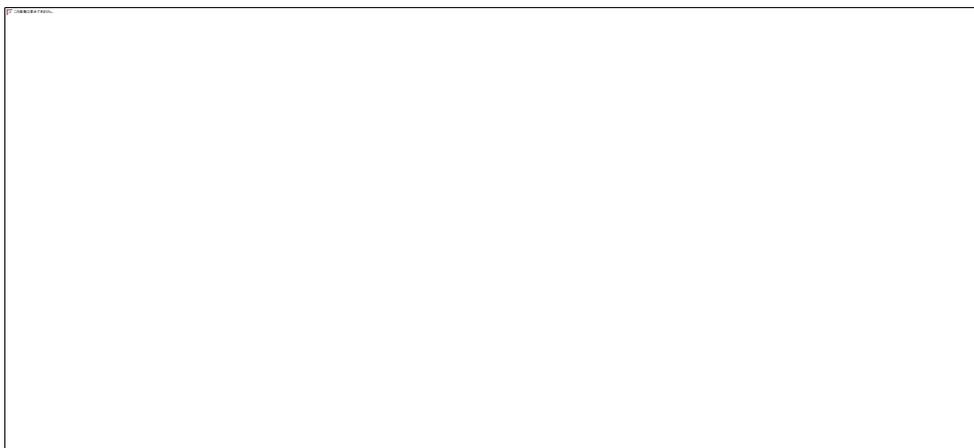
Y20 活動報告 (事前活動)

G7 / G20 Youth Summit 2018 プレイベント【ジェンダー問題】(3月24日)

Y7 Canada に先立ち、①G7シャルルボワ・サミット首脳団へのコミュニケ（共同声明）提出に向け、日本代表団の提言に、より多くの日本の若者の意見を取り入れる、②国際問題に関心を持つ若者の集結、ネットワーキングの場の提供という二つの趣旨で、事前パブリックイベントが開催された。外務省が主催していた国際会議 World Assembly for Women (WAW!) の公式サイドイベントとしての開催とさせていただいた。

テーマは「ジェンダー×○○」。本年のG7ホスト国カナダの首相・トルドー氏は、フェミニストを自称するほどジェンダー問題への関心が深く、Y7の議題のうちの一つにもなっている。今回は初の試みとして、全ての議題のテーブルを用意するのではなく、あえてジェンダー問題のみにフォーカスしたイベントとした。その際、「ジェンダーは複数の社会問題にまたがって存在している」との信念から、「ジェンダー×教育」「ジェンダー×SDGs」といった様々なトピックを用意し、テーブルごとに出る結論の共通点・相違点を吟味していった。60人を超える参加者の層は高校生から社会人と幅広く、また性別の割合がほぼ50%ずつと均等だったのも非常に喜ばしいことだったといえる。

イベントを通して、代表団は、グローバル問題に関心の高い若者の意見を聞き、密度の濃いディスカッションを行う事で、「日本代表」としてY7サミットに参加するために必要不可欠な日本の若者の意見を吸収することができただけでなく、提言予定の政策案をブラッシュアップすることができた。また、参加者からも勉強になったとの意見を多くいただき、Y7サミット及び弊団体に興味を持って頂くとても良い機会となった。



Y20 活動報告 (事前活動)

防衛大学訪問 (6月26日)

6月26日に、防衛大学校を訪問した。防衛大学校研修では、構内の見学、安全保障についてのディスカッション、代表団からのY20メイントピックに関するプレゼンテーションを行った。また、それらに対して防衛大学校の生徒との意見交換を行った。研修を通して、安全保障の歴史的変遷と今後のトレンドを学習することができた他、防衛を専門にした生徒たちの視点からY20のトピックについての新鮮な見解を聞くことができ、非常に有意義な研修となった。



Y20 Pre-Event (7月7日)

7月7日に、Y20に先駆けて東京大学にてY20 Pre-Eventを開催した。高校生・大学生・若手社会人 約60名が参加した。

Pre-Eventでは、Y20の4つのトピックについてイントロダクションのプレゼンテーションをした後に、各トピックの小グループに別れ、ユースとしてどのような政策提言ができるかを議論した。

多種多様な背景の若者が集まり、4つのトピック全てで非常に活発な意見が行われた。



Y20 活動報告 (サミット中の活動)

連日、複数のプログラムが並行して進行した。詳細のスケジュールは以下の表を参照されたい。

Discussion Session: 用意された4つの議題に関して、有識者と意見交換をした。

Learning Session: Y20 の主要目的である政策作成やアドボカシーに向けて、その必要性と方法論を学んだ。

Creation Session: 政策提言書の作成と、Social Innovation Warehouseを通じたデザインシンキングを行なった。

Advocacy Session: 政策提言の材料となる体験をしたり、政策提言後にどのようなアドボカシーができるかを体験したりした。

Side Events: 毎日の本プログラムが終了した後、観光やGalaなどのイベントが行われた。

	Saturday AUG 11	Sunday AUG 12	Monday AUG 13	Tuesday AUG 14	Wednesday AUG 15	Thursday AUG 16	Friday 08:00 + 09:00 AUG 17	Saturday 08:00 + 09:00 AUG 18	Sunday AUG 19
07:00 - 07:30				BREAKFAST	BREAKFAST	BREAKFAST	BREAKFAST	BREAKFAST	
07:30 - 08:00									
08:00 - 08:30		BREAKFAST	BREAKFAST	TRANSFER	TRANSFER	TRANSFER	TRANSFER	TRANSFER	BREAKFAST
08:30 - 09:00			TRANSFER						
09:00 - 09:30				MEETING PERIOD	MEETING PERIOD	MEETING PERIOD	MEETING PERIOD		
09:30 - 10:00									
10:00 - 10:30				LEARNING SESSION 1	DISCUSSION SESSION 1	LEARNING SESSION 2	LEARNING SESSION 3	MEETING PERIOD	
10:30 - 11:00					COFFEE BREAK	COFFEE BREAK	COFFEE BREAK	COFFEE BREAK	
11:00 - 11:30				COFFEE BREAK	LEARNING SESSION 3	CREATION SESSION 1	DISCUSSION SESSION 4	JOB INTRODUCTION SESSION	
11:30 - 12:00				DISCUSSION SESSION 2				PERFORMING	
12:00 - 12:30									
12:30 - 13:00				BUNCH	BUNCH	BUNCH	BUNCH	BUNCH	
13:00 - 13:30									
13:30 - 14:00				BUNCH					
14:00 - 14:30									
14:30 - 15:00									
15:00 - 15:30									
15:30 - 16:00									
16:00 - 16:30									
16:30 - 17:00									
17:00 - 17:30									
17:30 - 18:00									
18:00 - 18:30									
18:30 - 19:00									
19:00 - 19:30									
19:30 - 20:00									
20:00 - 20:30									
20:30 - 21:00									
21:00 - 21:30									
21:30 - 22:00									
22:00 - 22:30									
22:30 - 23:00									
23:00 - 23:30									
23:30 - 24:00									
24:00 - 24:30									
24:30 - 25:00									
25:00 - 25:30									
25:30 - 26:00									
26:00 - 26:30									
26:30 - 27:00									
27:00 - 27:30									
27:30 - 28:00									
28:00 - 28:30									
28:30 - 29:00									
29:00 - 29:30									
29:30 - 30:00									
30:00 - 30:30									
30:30 - 31:00									
31:00 - 31:30									
31:30 - 32:00									
32:00 - 32:30									
32:30 - 33:00									
33:00 - 33:30									
33:30 - 34:00									
34:00 - 34:30									
34:30 - 35:00									
35:00 - 35:30									
35:30 - 36:00									
36:00 - 36:30									
36:30 - 37:00									
37:00 - 37:30									
37:30 - 38:00									
38:00 - 38:30									
38:30 - 39:00									
39:00 - 39:30									
39:30 - 40:00									
40:00 - 40:30									
40:30 - 41:00									
41:00 - 41:30									
41:30 - 42:00									
42:00 - 42:30									
42:30 - 43:00									
43:00 - 43:30									
43:30 - 44:00									
44:00 - 44:30									
44:30 - 45:00									
45:00 - 45:30									
45:30 - 46:00									
46:00 - 46:30									
46:30 - 47:00									
47:00 - 47:30									
47:30 - 48:00									
48:00 - 48:30									
48:30 - 49:00									
49:00 - 49:30									
49:30 - 50:00									
50:00 - 50:30									
50:30 - 51:00									
51:00 - 51:30									
51:30 - 52:00									
52:00 - 52:30									
52:30 - 53:00									
53:00 - 53:30									
53:30 - 54:00									
54:00 - 54:30									
54:30 - 55:00									
55:00 - 55:30									
55:30 - 56:00									
56:00 - 56:30									
56:30 - 57:00									
57:00 - 57:30									
57:30 - 58:00									
58:00 - 58:30									
58:30 - 59:00									
59:00 - 59:30									
59:30 - 60:00									

Y20 活動報告 (サミット中の活動)

Opening (Day1)

Opening はUniversidad Siglo XXI にて行われた。本サミットの主催責任者Agustinより激励のメッセージをもらった後に、本サミットの目標を再共有し、delegate同士でアイスブレイキングを行った。

Discussion Session

(Day1-2)

サミットでのメインの4つの議題について、1議題あたり5人程度の有識者がプレゼンテーションをし、その後ユースdelegateとの間で意見交換をした。有識者は公私両セクターより広い幅のキャリアを持った方が来ており、一つのトピックについて複数の視点からの意見を吸収することにより、政策提言と"Social Innovation Warehouse" (次ページ参照) に向けて立体的な議論をするための土台づくりができた。

Learning Session

Y20 の主要目的である政策作成やアドボカシーに向けて、その必要性と方法論を学んだ。アドボカシーに取り組んでいる有識者とdelegateやユースゲストが各国でのアドボカシーの取り組みや意見を共有し、全体でディスカッションを行った。



Y20 活動報告 (サミット中の活動)

Creation Session

【Social Innovation Warehouse】 (Day1-3)

「Y20各国で実際に行われている social project を他国に、延いては世界中に導入する」という目的の下で、advocacyを行うにあたっての思考プロセスを訓練した。具体的には、まず実在のプロジェクトを複数の視点から考察し、それぞれのdriverについて positive, challenges, opportunities を列挙した。その後、positiveを残したまま challenges と opportunities をどのように改良すれば他国に応用できるかを考えた。



【Policy Recommendation Session】 (Day3-6)

Sustainable Development, Education and Skills for the 21st Century, Future of Work, Entrepreneurship and Self-Employmentの4つ議題について、各々政策提言をまとめた。全ての議論は1部屋で行われ、delegateが自由にトピック間を移動できる環境だった。初日にそれぞれの議題について最重要だと思われる課題を9個ピックアップし、delegate全員で優先順位をつけることで、政策提言に盛り込む要点を絞った。その後、discussion sessionやlearning sessionで学んだことを参考にしながら、実際の政策提言書を何度もドラフトした。最終ドラフトが終わった後、各国のdelegate全員で政策提言書を通してチェックし、最終的なコンセンサスが得られるまで細かい修正を続け、最終提言をまとめた。



Y20 活動報告 (サミット中の活動)

Advocacy Session

【Joint Advocacy Session】

Y20に参加しているユース代表と政府関係者との議論セッション。Y20や他の公式附属会議でまとめた政策提言がどのようなプロセスでG20各国に還元されるのか、またそのプロセスについての意見交換を行なった。ユースの視点からY20の位置付けや政策提言の処理プロセスについて率直な意見を政府関係者に共有した。

【Advocacy】

コルドバ中心地から車で約30分の場所にあるMr.Guillermo Health Center※を訪れ、当該プロジェクトサイトのブリーフィングの後、ボランティア活動を通し子供との交流を深めた。

※Mr.Guillermo Health Centerは国の支援などを受けず、地域の自助により成り立っているヘルスケアセンター。職員5名とボランティアで成り立っており、教育や栄養指導などを行っている。

Side Events (Day0-5)

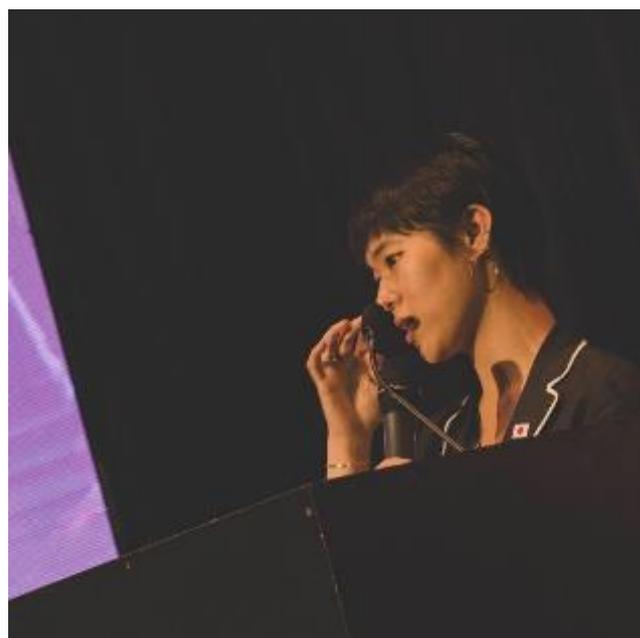
毎日、本プログラム終了後に観光や交流イベントも用意されていた。市内の美術館訪問やローカルのロックバンドのライブなどコルドバ魅力を満喫できるものから、model G20の高校生との交流会や地元レストランでの夕食まで、内容は様々だった。特にDay0のInternational Youth Day イベントでは、政府関係者やサミットの主催責任者からコメントをいただいた後に、立食パーティーにて delegate 同士の交流を深め、翌日からのサミットに備えることができた。Day5のGala Nightでは、長期間のサミット最終日を控えて、各国の代表が各々の文化を反映した正装をして、アルゼンチンタンゴのショーを楽しんだ。



Y20 活動報告 (サミット中の活動)

Closing Ceremony (Day6)

閉会式ではアルゼンチンの政府関係者のスピーチの後に、日本代表団長の北野が合意した政策提言を発表した。また来年日本がY20を主催するにあたり、アルゼンチンの主催者と日本の視察団の対談が行われ、会場全体の来年に向けての士気が高まった。最後に全員で集合写真を撮って、6日間に渡ったサミットは閉会となった。



政策提言を発表する北野



議論所感 (Sustainable Development)

Sustainable Developmentでは、2015年に採択されたSDGs(Sustainable Development Goals)を取り扱った。今回のサミット全体を通しての課題でもあったglocalな視点を持つ、つまり環境等グローバルに喫緊の課題を議論しながらも、同時にローカルな問題に焦点を充てることや、包括的な発展につながっていることを意識しながらの議論となった。

今回サミットでは①Education②Entrepreneurship and Self-Employment③Future of Work④Sustainable Developmentの4つの議題に分かれたが、①～③を包括する概念としてSustainable Developmentが存在するため、他3議題での議論をいかに考慮し包括的な提言としてまとめるかが大きな課題であった。また、17項目あるSDGsの何処に重きを置くかに関して、議論開始時からメンバー全員で苦心し多くの時間を割いて決めることとなった。結果としては環境に関する議論にフォーカスすると決定したが、全体を通し時間との勝負となった。

議論に際しては個々人の経験を基に進めたため、G20各国の実情に即した政策を作成することができたと考える。また各代表の経験やそれに対する意見をどのように政策に反映させるか丁寧に議論できたのは、相互理解だけでなく議論をより実りあるものにするきっかけでもあった。

今回の提言で特に印象的だったのは、経済発展と環境保護をどのように両立させるべきかという点であった。具体的には経済的観点を抜きにして環境保全を第一に考えていくべきなのか、経済によって環境保護が利益を得られる仕組みに重点を置くべきなのかという議論が行われた。世界的に気候変動への警笛が鳴らされており、個々人も環境保全の重要性を認識はしている一方、具体的な行動に繋がっていない場合が多い。また、市場で環境保護をうたう商品やビジネスが進まない現状も存在する。結論として、環境保護を進める方法として経済的観点は落とすことができない重要な要素との方針で合意が得られた。長期行動目標としては、SDGsに関する教育を進めると同時に、環境保護を経済的価値として認識し浸透させる事、ビジネスの仕組みとして成立させる事を採択した。

Y20全体での最終会合で、開発途上の国が先進国と同様の環境保護に対する責任を負うのは不平等ではとの指摘がなされた。この論点に関しては時間の制限により途中で議論を断絶する事となり、残念であった。

全体を通しては、大変幅広いトピックであったにも関わらず、他議題の議論を踏まえつつ環境に焦点を絞り議論ができたのはよかった点であると思う。



議論所感 (Entrepreneurship and Self-Employment)

Entrepreneurship and Self-Employment では、21世紀の仕事変革のトレンドのうちの一つである起業をどのように支援できるかについて議論した。

Entrepreneurshipには、Opportunity entrepreneurship とNecessity entrepreneurshipの両者について、潜在的起業家が行政より受けるサポートの可能性について議論した。議論のポイントとしては ①起業を取り巻くエコシステムの充実 ②女性起業家の支援 ③social entrepreneurshipの促進の3つだった。

当議題のメンバー全員で、起業するためのエコシステムの構築が世界的な課題であるという認識を共有していることを確認した。中でも起業資金の獲得が最も早急かつ重要性が高いという見解で一致したため、議論はファンドや税金などのfiscal incentive 関連の話が中心だった。経済面のステークホルダーとしてベンチャーキャピタルやエンジェルファンドなどが存在する中で、G20各国としてはどのように起業家の資金調達のプロセスに介入できるかという議論に時間をかけた。また、Fiscal IncentiveやFunding Solutionだけではなく、起業をするにあたり必要な物理的インフラについても議論を展開した。実際にビジネスを6つ立ち上げており、現在は若手起業家の育成にも従事している当事者ゲストの体験を元にしながら、頭の中のアイデアをビジネスにするまでのプロセスを全員で一つ一つさらいながら、G20各国の介入の余地を模索した。エコシステムにおいては、ノウハウや資金など、すでに存在している情報やファンドへのアクセスが政策提言の鍵であるという結論でまとまった。

今回のサミットでは政策提言にジェンダーの側面も包含することを重要視しており、女性起業家の支援の議題は自然とテーブルに上った。女性は男性と比較して起業の機会が少ないことを受けて、この問題に対する政策提言も行なった。この際、特に議論されたのがmarginalised populationについて言及するか否かだった。メンバー間でも意見が割れたが、entrepreneurshipについてはまだベースとなる枠組みさえもできていないこと、marginalised populationを具体的に明確化することが非常に困難であることから、今回は時間が許さず最終的に政策提言には表現自体は入れないことで同意した。繊細ではあるが大事な議論ポイントであると思うので、時間の都合で十分に議論ができなかったのは残念だった。
(次項に続く)



議論所感 (Entrepreneurship and Self-Employment)

大きな議論ポイントの一つとして、social entrepreneurshipの促進が取り上げられたのは意外だった。これはsustainable developmentタスクフォースとの議論で政策提言に盛り込むことが決まった項目だが、起業そのものが21世紀の発展に強く影響を及ぼしていることを再認識した。社会貢献としてのsocial entrepreneurshipのインパクトを測定する指標やフレームワークの作成が議論の鍵となった。

尚、当議題ではentrepreneurshipとself-employmentに必要な不可欠なスキルについても議論した。技術革新により、21世紀に置ける働き方や仕事のあり方も変化するにあたって、今後は全員がvocational educationを受けられるような教育システムや教育カリキュラムを構築すべきであるという認識で同意した。これらのスキルについては、Future of Workの分科会との内容の一部重複により、政策提言上はFuture of Workの項目に含有されることとなった。

4つの議題の中で最も議論がスムーズに進行した印象を受けた。起業に関してはまだ強固な礎がないということ、また企業のステップに関して議論に参加した全員の間ですでに共通認識があったことが、理由として挙げられると思う。



個人所感 (代表団長 – 北野)

はじめに、本サミットへの参加に際してご支援頂いたスポンサーの皆様、G7/G20 Youth Japan、その他ご尽力くださった全ての皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げたい。私が本サミットへの参加を決意したのは「政策提言」がどれほどの力を持っているのかを身をもって体験したい、という思いからだ。Y20はG20の公式附属会議としての位置付けがされているものの、ユースレベルでの議論の政府レベルに対しての影響力についてはブラックボックス的な部分があると感じていた。

本サミットを通して得られたものは多い。議論での姿勢やlanguageの選び方、「世界を変える」という同じ野心を抱いた他delegateたちとの繋がりなどは、言うまでもなくこれからの自分の貴重な財産になるに違いない。中でもとりわけ最も自分の糧になったのは、大勢のうちの一であるgame playerがいかにして唯一無二のchange makerになるのかを勉強できた点であろう。

今年のY20サミットでは政策提言に向けた議論の他に、現役change makerの経験を共有する”Social Innovation Warehouse”や、ユースの生の声を政府レベルの大人達に直接伝える”Joint Advocacy”などのサブプログラムが設けられていた。例年とは異なるプログラムに対し不安や不満を露わにするdelegateもいた。しかし私自身はこの異色なY20サミットにこそ、参加することができて良かったと感じている。

確かにY20サミットの一番の目的は政策提言に向けた議論をし、提言書をまとめることだが、実際に世に出るのはたった2枚の政策提言であり、しかもその抽象的な言い回しは表面的にさえみえる。しかしその背景にはサミット参加者にしかわからない深く具体性を追求した長時間に渡る議論がある。サミット不参加者は公開された政策提言書をベースにした各々のアドボカシー活動により、実社会で影響力を持ったchange makerになることができる。初めは意義がわからず参加していた多種多様なプログラムも、サミット終了時には全てが一つの線で繋がっていることに気づいた。政策提言の前後で起こる出来事も垣間見て、一連の時間軸として捉えることができたのが本サミットの一番の収穫であった。政策提言の影響力を知るのがサミット参加の動機だったと先に述べたが、その影響力を決定するのは己以外の誰もないということに気付かされた。

さて、来年のG20サミット・Y20サミットは日本で開催されるが、当然ながらその中で日本代表の役割は非常に大きい。本サミットでも日本代表団の意見が政策提言において鍵を握る部分が多々あった。一国の代表団二人の意見が議論の場にいる大人数の意見に強い影響を及ぼすことができるという可能性、またその一方で、発言の一言一句に責任が伴うという並々ならぬプレッシャーを感じた。来年、またその先に向けて、高いchange maker精神を持った野心的なユースの活躍に期待をしたい。



個人所感（代表－木曾）

まず本サミットへの参加に際してご支援頂いたスポンサーの皆様、財団の皆様、また、G7/G20 Youth Japanメンバーの皆様に厚く感謝申し上げます。代表団2名をアルゼンチンに派遣下さり、またそれぞれのフェーズで厚いサポートを賜った。一週間に渡るプログラムを遂行するのは、皆様のご協力なしにはできないことだったと改めて感じている。

ユースがG20への政策提言を行う場として設けられているY20サミットは、政策提言のみならず多くのものを学び持ち帰る場として大変有意義なものであったと感じる。それは20カ国以上の本当に様々なバックグラウンドを持つ人々との交流や議論であり、同時に日本について深く考える時であり、若者のパッションに驚かされる時だった。

今回のサミットはユース一人ひとりに焦点をあて、G20の政策提言だけでなくChangeを起こす主体としてプログラムが組まれていた。Glocal（政策がグローバルな視点であると同時に地域社会の問題にも根ざしたものであること）に焦点が充てられていた点、政策提言に関しブリーフィングだけでなく議論や体験を通し包括的に学び取り組めたことにその趣旨が現れていた。

政策提言は国のトップにより決められることですが、真に人々を取り込み包括的であり、同時に問題の解決に導いているかという点は見逃せないポイントだと個人的に感じている。例えばヘルスケアセンターなど実際にその地域に生きる人と触れる体験。経済会合であるG20は経済に焦点を充てる中、議論がときに各国の利益で綱引きとなるような側面も多いのではないだろうか。誰のための何のための政策であるのか、政策としてできることは何であるか、なにが実現すべき未来であるのか再認識するきっかけを得られた大変意義深い体験だった。また実際のチェンジメーカーによる講演や実際の交流を通して彼らのパッションに触れる機会が多く用意されていたことで私たちユースが、今と未来とを担う主体であることを再認識することができた。

また、政策提言ではこの議論の継続性について検討される機会があった。いかにこのユースの議論を継続させ若者の声を届け続けるか、継続性を担保するにはどうしたらいいのかに白熱した議論が行われたことは、ユースの各国代表のサミットへの思いの強さや情熱を感じた瞬間の一つだったと感じる。チェンジメーカーである誇りを持ったユースの情熱を絶やさず伝え続けるためにも、来年度の日本での開催の意義は大きなものとなるだろう。

サミット全体を通し世界が驚くべき速さで進化していること、それにyouthが大きな役割を担っていることを実感し、参加する前と参加したあとで未来への見方が大きく変わったことに気付いた。プログラム中に「未来に対してOptimisticかPessimisticの割合によって左右に長い一列をつくる」ワークがあったが、Optimistic側の一人として、今回のサミットで得たかけがえのない体験と経験を生かしながら情熱を持ち今後も歩めたらと思っている。



Conclusion

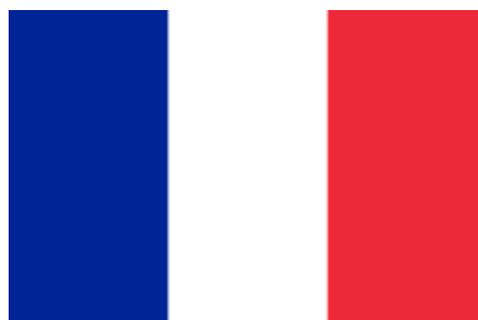
今後の活動について

Y7 Summit 2019

場所：フランス

時期：2019年7月頃を予定

代表団：2019年初旬に選抜予定

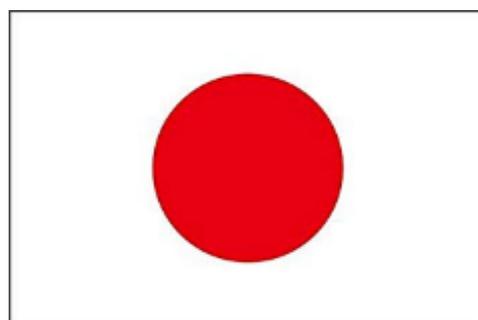


Y20 Summit 2019

場所：日本

時期：2019年5月頃を予定

代表団：2019年初旬に選抜予定



協賛・謝辞

協賛

公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱UFJ国際財団

謝辞

【顧問】

安部忠宏先生（元特命全権大使）

【ご訪問させて頂いた方々】

防衛大学校 平山茂敏 教授
中沢信一 准教授
学生の皆様

【プレイベント【ジェンダー問題】ゲストの方々】

石川雅恵氏（UN Women日本事務所所長）
伊東正仁氏（損害保険ジャパン日本興亜株式会社取締役・常務執行役員）
大鷹正人氏（外務省 総合外交政策局 審議官、国連担当大使）
白河桃子氏（少子化ジャーナリスト、作家、相模女子大学客員教授）
成澤廣修氏（文京区長）
原琴乃氏（外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 課長補佐）
村上由美子氏（OECD東京センター所長）
与那嶺涼子氏（外務省女性参画推進室外務事務官、ジェンダーと平和構築専門）
ヴィクトル・スタニエツキ氏（駐日欧州連合代表 政治部 一等書記官）

【Y7 Summit 報告会/Y20 Pre-Eventご講演者】

ステファニー・レトルノー氏（カナダ大使館 二等書記官）



添付資料



Youth 7 2018, Call to Action

PREAMBLE Young people are the most valuable resource available to the G7. Yet, we harbour deep concerns about the future; the security of the intersectional identities we cherish, the state of the environment, and confronting a changing labour market. More than 40 consultations held across the G7 underscored the urgency to act on these issues. In April 2018, 32 youth delegates met in Ottawa on the unceded territory of the Algonquin people to discuss. To realize a more inclusive, cleaner, decarbonized, and sustainable world by 2030, we call G7 Leaders to commit to immediate action.

GENDER EQUALITY: Responding to Movements Vocalizing Sexual Assault & Gender-Based Violence

Vision for 2030: We will live in a world where everyone's bodily integrity is recognized and respected, regardless of gender identity or sexual orientation, and where all people live free from violence, discrimination, sexual harassment and abuse

By the 2018 G7 Summit We call upon each G7 government to appoint an empowered Special Advisor to the Head of Government for Freedom from Sexual Assault, Harassment, and Gender-based Violence & for Sexual Health

By the 2024 G7 Summit In coordination with each country's Special Advisor, we call on the G7 to develop common strategies with the private sector and civil society to address and report annually on:

- All forms of gender-based violence including homophobia, transphobia and sexual trafficking in vulnerable communities
- Online harassment, youth mental health, toxic masculinity and workplace culture
- Adapting sexual & reproductive health education to the 21st century

CLIMATE CHANGE & ENVIRONMENT: Saving All Bodies of Water through Immediate Action on Plastics

Vision for 2030: We will live in a world where marine ecosystems and biodiversity are protected, valued and flourishing and where all governments have committed to rapid decarbonisation

By the 2018 G7 Summit We call upon the G7 to:

- (1) fully ban micro plastics in cosmetics with ambitious targets to quickly phase out other harmful plastics, and
- (2) establish a G7 working group that generates innovative ways to protect bodies of water, such as legal rights, expansion of protected areas, & the creation of a list of endangered waters

By the 2024 G7 Summit We call on G7 governments to have led the creation of a binding international treaty that coordinates the sustainable management and revitalization of fresh and salt water bodies

FUTURE OF WORK: Enshrining Data Privacy as a Human Right

Vision for 2030: We will live in a world where new and existing technology serves people better and responsibly promotes inclusion, while protecting individual privacy and data

By the 2018 G7 Summit We call upon the G7 to clearly articulate that the human right to privacy includes full ownership of personal data, even when data are used and modified by non-human entities for profit

By the 2024 G7 Summit We call on G7 governments to have led an international effort to articulate the ownership of personal data as a human right, while supporting global compliance efforts



YOUNG
DIPLOMATS
OF CANADA

Y20 Summit Cordoba Policy Recommendations

Preamble

In an age of increasing uncertainty, the future holds immense opportunities and undoubtedly brings many challenges. Many of these are present today. There is no single future, but rather multiple trajectories. We are not on track to meet the aspirations outlined in the 2030 Agenda and associated frameworks, including deliverables of the Paris Agreement. Our current economic system propagates inequalities between and within countries, fails to mitigate disruptive effects of technology on employment, and ecological degradation beyond already crossed planetary boundaries.

We, the delegates of the Y20 summit, have outlined recommendations for setting a path towards a safe, resilient, inclusive, equitable and sustainable future for all, in spite of decreasing international cooperation. We focus on four cross-cutting issues that have implications on all G20 discussions: Sustainability for Development, Education and Skills for 21st Century, Entrepreneurship and Self-Employment, and the Future of Work, with a gender dimension .

To achieve a future in which no one and no country is left behind, accountability and transparency is key in decision making processes at all levels. Young people have a right to meaningfully engage in the policy cycle, which appropriately mainstreams youth priorities in all policies so they become cross sectoral.

We envision a future in which everyone enjoys the human right to quality education and lifelong learning free from systemic and structural barriers and empowered by equal access to current and emerging technology. It promotes empathy, decent work with social protections, sustainable livelihoods, equitable financial prosperity, personal fulfillment, and the pursuit of happiness. In many ways, the future is now. If we work together, the future will be bright.

Sustainability

Fight climate change and improve measures of adaptation within the principles of climate justice

- Abandon inefficient subsidies, promote divestment in fossil fuels and replace weak renewable energy targets with economic incentive systems to enable the phase-out of all fossil fuels and a transition to 100% renewable energy.
- Support those disproportionately affected by climate change and recognize climate induced displacement as a legal ground for seeking asylum.
- Accelerate Implementation of the Sendai Framework for Disaster Risk Reduction in areas susceptible to climate-induced disasters.
- Internalise social and environmental externalized costs into unsustainable production by taxation and limitation.

Take economic action

- Move beyond the current concept of “growth“, including GDP, by developing a standardized definition of a ‘circular economy’, which incorporates clean energy, zero-waste design, decreasing consumption and widespread reuse of products and components, around which states can develop and agree upon specific goals and targets.
- Incorporate circular economic performance into periodic national and corporate reporting through the development of standardized circularity indicators (i.e. KPIs) at both national and corporate levels.
- Enable the improvement of global infrastructure by introducing international green bond unification and certification to encourage investors to conduct responsible investment and responsible lending.

Ensure representation and engagement of marginalised populations

- Proactively engage in the G20 processes with non G20 countries affected by macro-economic policies proposed and implemented by the G20.
- Develop international priorities that indicate measurable collective and national targets to ensure that marginalized populations are represented at all levels of government and civil organizations, and that their perspectives are included in policy development at national and international levels.

Education and 21st Century Skills

Create educational environments which are safe, inclusive and respectful

- Implementation of national policies which provides for mental and physical health education, awareness and specific teacher training to create in-school support systems and an adaptable integrated learning environment for people living with disabilities.
- Launching official campaigns against gender, identity-based and disability-oriented violence that takes places in formal and informal educational settings.
- Implementation of national policies that provides teachers with job security, financial stability, higher wages and the opportunity to further develop their skills to ensure quality education.

Free and equal access to quality education

- Ensure free and equal access to quality education from pre-school onwards, including vocational courses and non-formal education, which promotes lifelong learning for all for all, particularly vulnerable peoples, including refugees and displaced people.
- Implementation of national policy that provides for education from the age of 3, which is free and accessible to all regardless of socio-economic background.
- Set up the necessary agencies for the creation of safe physical and digital spaces for education accessible to all.
- Governments formally recognise the specific educational requirements of all marginalised groups and vulnerable peoples as [defined](#) by the United Nations Human Rights Council (2014).

Align the curricula with the required skills of the 21st century, by incorporating youth in its development.

- Guaranteeing upskilling, and re-training educational opportunities in the ever-changing digital world.
- Incorporating cross-cultural and diverse identity education, including social and interpersonal skills in the national curricula which promotes innovation and entrepreneurial spirit.
- Incorporating responsibility and empathetic global citizenship education, including knowledge about the Sustainable Development Goals framework into the national curricula.

Entrepreneurship and Self-Employment

Provide fiscal incentives and innovative funding solutions to spur the creation and growth of SMEs

- Provide fiscal incentives for startups and SMEs in the first two to five years from their incorporation followed by a certain profit threshold in order to support their growth at both national and international levels.
- Incentivize most profitable companies to financially invest in and support local startups and SMEs in the countries where they operate.
- Create multi-stakeholder risk-sharing and co-investment mechanisms to ease the difficulties entrepreneurs face when securing collateral for business loans, as well as loss of personal assets in case of bankruptcy.

Promote social entrepreneurship as a mechanism for sustainable development and financial resilience

- Establish a universal legal framework that defines social entrepreneurship along with impact measurement tools.
- Develop a national fund or an organization that finances a specific number of social enterprises with a positive social, cultural and environmental impact.

Create conducive and tailored environments in which entrepreneurs and self-employed individuals can thrive

- Create a specific legal status for entrepreneurs and self-employed individuals.
- Develop physical or virtual “one-stop-shops” at the national level for entrepreneurs to find information, register their SMEs, and receive legal and fiscal support, as well as other public services.
- Encourage formal and non-formal education on entrepreneurship, paying particular attention to young women.

Future of Work

Promoting workforce skills development and reskilling

- Establish a progressive scheme for companies’ expenditures dedicated to re-skilling programs for all their employees, proportional to their budget.

- Incentivize organizations to address gender gaps on skills and pay across public and private sectors, and report on remaining gaps.

Social Protection and Labor Market Considerations

- Establish transferable social protection coverage attached to the individual, regardless of job and employment status to ease workers' transition across sectors and geographies.
- Mandate fully paid non-transferable parental leave and care services coverage to enable workers to balance work while supporting a family regardless of their gender.
- Incorporate standards into labor market institutions such as increased unemployment benefits, collective bargaining, and ensuring employers provide physical and mental healthcare to support workers' well-being.

Governance of technology and data

- Establish a global assessment platform for evaluating the legal, ethical, social, economic, and environmental implications of technologies with all relevant stakeholders.
- Ensure equal access to current and emerging technology, protect privacy, and provide access to how one's own personal data is used upon demand as human rights.
- Promote the collection, assessment, and use of aggregate data on labor market trends to inform and share policy best practices between countries.

We, the delegates of the Y20, call for the continuation of the Y20 through the creation of the Y20 Troika to push forward our policy recommendations ensuring continuity and policy coherence across different international processes. This includes a mandatory review of previous policy recommendations at the beginning of each Y20 Summit. The head of delegation will become the Y20 national advocate for the year to push for the Summit outputs. G20 should invest in the implementation of the policy outcomes of the Y20, while respecting Y20 autonomy. The Y20 2018 Chairs firmly commit on a mid-and-long term basis, to operating the "Social Innovation Warehouse", scaling up youth actions. Young people, not only should be, but are shaping the world.